



府内高齢者の熱中症被害低減策としての住まいの温熱環境改善と温度認知による行動変容の促進

生命環境学部環境心理行動学（建築環境工学）研究室

活動場所



活動目的・背景

高齢者の熱中症は住宅内での発生が半数以上であるが、予防策としての住宅内の温熱環境改善には、冷房の他、日射熱の遮蔽や通風の促進など比較的簡便に実現できるものもある。今回の研究は「高齢者の住まいの夏期温熱環境の実態」「日よけシェードの効果」「取組による居住者の意識・行動の変化」の3点を明らかにするものである。



取組概要

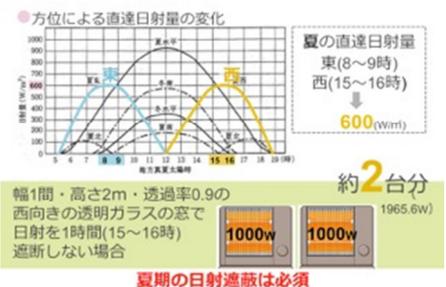
京都府内の有料老人ホーム入居者の協力を得て、京都市立大学地域貢献型特別研究（ACTR）として、「住まいにおける暑さと健康についてのアンケート調査」を実施した。さらに10軒の住宅で日よけシェードを設置、設置前後の室内温熱環境の測定、ヒアリング調査を実施した。



成果・今後の課題

熱中症への関心は95%と高く、関心がある人は温度計を確認する頻度が高いこと、カーテン・ブラインド以外の日射遮蔽対策は十分に行われていないことがわかった。また、シェードを設置すると、室温が低下するとともに、体感的にも涼しく感じるようになった。「見た目が良くない」等の改善意見もあったが、今回の調査が啓発となり、居住者の意識や行動に変化をもたらした。

直達日射量の影響



本取組に関する

生命環境学部環境心理行動学（建築環境工学）研究室

お問合せ先

TEL : 075-703-5426

E-Mail: n_mats@kpu.ac.jp

関連 Web サイト

<http://d.hatena.ne.jp/matsu-blog/20170619/1497862837>

<http://mat-lab5.com/?cat=18>